

妙法蓮華經如来寿量品第十六（自我偈）

（財）法華会 渡邊寶陽 監修

われほとけ え このかた へ ところ もろもろ こつしゆ

我仏を得てより来 経たる所の諸の劫数、

私が仏となることを得てよりこのかた、経過したのもろの劫の数は、

むりようひやくせんまん おくさい あそうぎ

無量百千万億載阿僧祇なり。

はかり知れない百千万億・載（十の十五乗）・阿僧祇という巨大な数である。

つね ほう と むしゆ おく しゆじよう きようけ

常に法を説いて、無数億の衆生を教化して、

私は常に法を説いて、億の無数倍という多くの衆生を教化して、

ぶつじゆう い しか このかた むりようじゆう

仏道に入らしむ。爾しより来 無量劫なり。

仏道に入らせてきた。そのようにしてこれまで、はかり知れない劫が過ぎた。

しゆじよう ぞ ため ゆえ ほうべん ねはん げん

衆生を度せんが為の故に、方便して涅槃を現す。

衆生を濟度するために、巧みなる手だてによって涅槃を現したのである。

しか じつ めつど つね こゝ じゆう ほう と

而も実には滅度せず、常に此に住して法を説く。

しかも実際には入滅したのではない。常に「こゝ」とどまって法を説き続けているのだ。

われつね こゝ じゆう もろもろ じんずうりき もつ

我常に此に住すれども、諸の神通力を以つて、

私は常に「こゝ」とどまっているが、さまざまな神通の力によって、

てんじゆう しゆじよう ちか いえど しか み

顛倒の衆生をして、近しと雖も而も見ざらしむ。

心が倒錯している衆生には、近くにいようとも見えないでいるのだ。

しゆわ めつど み ひろ しやり くじゆう

衆我が滅度を見て、広く舍利を供養し、

多くの人々は私の入滅を見て、広くその仏舍利（遺骨）を供養し、

ことごと みなれんぼ いだ かつじゆう こゝろ しょう

咸く皆恋慕を懐いて、渴仰の心を生ず。

あらゆる人々が皆、私を恋慕う心を懐いて、あこがれ慕う心を起こすのである。

しゆじゆうすで しんぷく しちじき こゝろにゆうなん

衆生既に信状し、質直にして意柔軟に、

衆生はすでに仏の導きに信順し、率直で柔軟な心をめぐらせ、

いっしん ほとけ み
一心に仏を見たてまつらんと欲して、
一心に仏を見たてまつりたいと願って、

みずか しんみょう お

自ら身命を惜しまず。

自ら身命をも惜しまないのである。

とき われおよ しゆそう とも りようじゆせん い

時に我及び衆僧、俱に靈鷲山に出ず。

その時にこそ、私と仏道修行者たちは、ともに靈鷲山に姿を現すのだ。

われとき しゆじよう かた つね ここ あ めつ

我時に衆生に語る。常に此に在って滅せず。

私は、その時に衆生に語る。私は常に、ここにあつて入滅することはない。

ほうべん りき ゆえ めつ ふめつ げん

方便力をもつての故に、滅不滅ありと現ず。

巧みな手だての力によって、入滅を現したり、また入滅しない姿を現すのだ。

よこく しゆじよう くぎよう しんぎよう もの

余国に衆生の恭敬し信樂する者あれば、

すなわち、他の国土の衆生で、恭しく敬い、信じ願うものがいたならば、

われまたか なか おい ため むじよう ほう と

我復彼の中に於いて為に無上の法を説く。

私はまたその国土において、彼らにこの上ない法を説くのである。

なんだち これ き ただわれ めつど おも

汝達此れを聞かずして、但我れ滅度すと謂えり。

なんじたちは、この私のことばを聞かないで、ただ私が入滅したと思ひこんでいる。

われもろもろ しゆじよう み くかい もつぎ

我諸の衆生を見れば、苦海に没在せり。

私がさまざまな衆生を見ると、なんじらは苦の海に没してしまっている。

かるがゆえため み げん

故に為に身を現ぜずして、

そのため、私は姿を現さないで、

そ かつこう しょう

其れをして渴仰を生ぜしむ。

そのことよつて、なんじらに、あこがれ慕う心を起こさせる。

こころ れんぼ よ すなわ い ため ほう と

その心恋慕するに因つて、乃ち出でて為に法を説く。

なんじらの心が私を恋慕うことよつて、そこではじめて出現して法を説くのだ。

じんずうりき かく ごと あ そうぎ こう お
神通力は是の如し 阿僧祇劫に於いて、
私の神通の力はこのとおりである。阿僧祇の劫という無限の時間にわたって、

つね りようじゆせんおよ よ もろもろ じゅうしよ
常に靈鷲山及び、余の諸の住処にあり。
常に靈鷲山や、
他のさまざまな所において法を説くのである。

しゆじようこうつ だいか や み とぎ
衆生劫尽きて 大火に焼かると見る時も、
衆生が、この世の終末を迎え、大火に世界が焼かれると見える時にも、

わ こ ど あんのん てんにん つね じゅうまん
我が此の土は安穩にして、天人常に充滿せり。
私のこの国土は安穩であって、
天の神々や人々が常に満ちあふれている。

おんりん もろもろ どうかく しゆじゆ たから しょうこん
園林 諸の堂閣 種種の宝をもつて莊嚴し、
豊かな園の樹木や、さまざまな堂閣は、種々の宝によって、おごそかに飾られ、

ほうじゆ けか おお しゆじよう ゆらく ところ
宝樹花果多くして 衆生の遊樂する所なり。
宝づくりの樹には花が咲きほこり果実が多く実って、衆生が遊樂する場所である。

しよてん てんく う つね もろもろ ぎかく な
諸天天鼓を撃つて、常に諸の伎樂を作し、
天の神々は天上の鼓を打ち、
常に、もろもろの音楽をかなでて、

まんだらけ ふ ほとけおよ だいしゆ さん
曼陀羅華(天妙華)をふらせて、
曼陀羅の華(天妙華)をふらせて、
仏や大勢の会衆の上に散らしている。

わ じようび やぶ しか しゆ や つ
我が浄土は毀れざるに、而も衆は焼け尽きて、
私の浄らかな仏国土は壊れることはない、
しかし人々は世界の終末の大火に焼け尽くされて

う ふもろもろ くのうち かく ごと ことごとじゆうまん み
憂怖諸の苦惱、是の如き悉く充滿せりと見る。
憂いや恐怖、さまざまな苦惱、そのようなものが充滿していると見ている。

こ もろもろ つみ しゆじよう あくこう いんねん も
是の諸の罪の衆生は、悪業の因縁を以つて、
これらの罪多き衆生は、
悪しき行いの報いによって、

あそう ぎこう す さんぼう みな き
阿僧祇劫を過ぐれども、三宝の名を聞かず。
阿僧祇の劫という長時を過ぎても、
仏・法・僧の三宝の名すら聞くことがない。

もろもろあら くどく 諸の有ゆる功徳を修し しゅ 柔和質直なる者は にゆうわ しちじき 則ち皆、 もの すなわ みな
いろいろな功徳を積み、 柔和で率直な多くの人々は誰でも皆、

わ みここ 我が身此に在って、法を説くと見る。 ほう と
私の身体がここに現されて、 法を説くのを見る。

あ とき 或る時は此の衆の為に、 しゅ 仏寿無量なりと説く、 ため
ある時には、 この人々のために、 仏の寿命ははかり知れないと説き、
ぶつじゆ むりよう

ひさ いま 久しくあつて乃し仏を見たてまつる者には ほとけ
久しい後に、 ようやく仏を見たてまつるものに対しては、

ため ほとけ 為に仏には値い難しと説く。 あ がた と
仏に出遇うことは困難であると説くのだ。

わ ちりき 我が智力是の如し、慧光照らすこと無量に、 えこうて
私の智慧の力はこのようであり、 その智慧の光が照らすところは、 はかり知れない
じゆみよう むしゆこう

寿命 無数劫、久しく業を修して得る所なり。 う
寿命は無数の劫の長さであり、それは久しい間修行して到達し得たところなのである。

なんだち ち 汝等智有らん者此に於いて疑を生ずることなかれ。 ここお
なんじたちよ、智慧あるものは、このことに疑念を生じてはならない。 うたがい

まさ だん 当に断じて永く尽きしむべし。 なが
疑念を断じて永遠になくしてしまふべきである。

ぶつご じつ 仏語は実にして虚しからず。 むな
仏のことはは真実であつていつわりはない。

い よ 医の善き方便をもつて、狂子を治せんが為の故に、 ほうべん
医師が、すぐれた巧みなる手だてによつて、心を惑わしてしまった子どもたちを治療するために、 おうじ

じつ あ 実には在れども而も死すというに、 しか
実際には生きているのに、 死を迎えたといつても、

よ こもう と
能く虚妄を説くものなきが如く、
誰もそれをいつわりだと言いたることができないのと同様に、

われ また こ よ ちち もろもろ くげん すく もの
我も亦為れ世の父、諸の苦患を救う者なり。
私もまた、この世の父であって、あらゆる苦しみを救うのである。

ぼんぷ てんどう もつ
凡夫の顛倒せるを為て、
凡夫は心が倒錯しているので、

じつ あ しか めつ い
実には在れども而も滅すと言う。

真実には導きつづけているのだが、あえて入滅すると私は言うのである。

つね われ み もつ ゆえ
常に我を見るを以ての故に、
常に私を見ているために、

しか きようし こころ しょう ほういつ ごよく じゃく
而も僑恣の心を生じ、放逸にして五欲に著し、
かえって、おごりたかぶる心を生じて、
勝手きままに五官の欲望にとらわれ、

あくどう なか お
悪道の中に堕ちなん。

悪道に堕ちこんでしまうのだ。

われつね しゅじよう どう ぎよう どう ぎよう し
我常常に衆生の道を行じ、道を行ぜざるを知つて
私は常に衆生が、
仏の道を求めつづけているか、いないかを見極めて、

ど ところ したが ため しゅじゆ ほう と
度すべき所に随つて、為に種種の法を説く。
濟度すべき道すじに沿つて、
なんじらに種々の法を説くのである。

つね みずか こ ねん な
毎に自らは是の念を作す。
私はいつもこのように念じ続けている。

なに もつ しゅじよう むじようどう い
何を以てか衆生をして、無上道に入り、
どのようにして、
衆生をして、
この上ない智慧に入らせて、

すみやか ぶっしん じようじゆ え
速やかに仏の悟りの境地を成就させることができるかと。
速に仏身を成就することを得せしめんと。